

児童の「学びたい」を大切にした外国語活動の カリキュラム・マネジメント

赤坂 芳美 (柏市立柏第七小学校教諭)

浅野 信彦 (文教大学教育学部)

Curriculum Management for Foreign Language Activities with
Emphasis on Children's 'Desire to Learn'

AKASAKA YOSHIMI, ASANO NOBUHIKO

(Kashiwadainana Elementary School, Kashiwa-City)

(Faculty of Education, Bunkyo University)

要 旨

2020年度から高学年で外国語が教科化される。教員の間には「英語を教える自信がない」という不安や焦りが広がっている。いま必要なことは、第一に、教師が児童の実態を捉え、彼らの「学びたい」という気持ちを引き出す指導計画を作成すること、第二に、外国語の学習による児童の変容を把握し、成果と課題を明らかにした上で、指導計画の改善につなげることである。つまり、カリキュラム・マネジメントを機能させることが鍵となる。本論文は、赤坂が前任校で取り組んだ外国語活動の実践を報告するとともに、浅野が研究者の立場から、これをカリキュラム・マネジメントの事例と捉え、その意義を考察するものである。

1. はじめに

小学校学習指導要領の改訂に伴い、2020年度から高学年で外国語活動が「外国語科」として教科化され、中学年では「外国語活動」として新たに位置付けられる。新学習指導要領において、高学年では、従来の外国語活動の内容に「読むこと」「書くこと」を加えて、これらを総合的・系統的に扱う教科学習を展開することが求められている。

小学校教員の実態をみると、「英語を教える自信がない」「発音が苦手だからできない」といった、外国語科を指導するにあたっての不安や焦りが広がっているように思われる。

しかし、2020年度からの本格実施が差し迫っている今、児童に少しでも「わかった」「できた」「楽しい」という実感を与えられ、授業を展開できるようにしなければならない。そのために必要なことは、第一に、教師が児

童の実態を捉え、彼らの「学びたい」という気持ちを引き出す指導計画を作成することであろう。第二に、外国語科の学習を通しての児童の変容を客観的に把握し、実践の成果と課題を明らかにしたうえで、指導計画の改善につなげることであろう。言い換えれば、カリキュラム・マネジメントの「PDCAサイクル」(「計画－実践－評価－改善」のサイクル)を機能させることが鍵となる。

筆者(赤坂)の前任校である柏市立酒井根東小学校では、2017年度から高学年は年間70時間、中学年は35時間の外国語活動を実施している。高学年は週1時間の授業に加え、朝モジュール15分×週3日と委員会・クラブ活動がない日を外国語活動の時間に充てて時数を確保している。2016年度2学期から、朝モジュールの時間には、児童の学習意欲を高めるための工夫の一貫として、麗澤大学の学生

の協力を得て外国語活動の実践に取り組んでいる。さらに「楽しく学び、生活に活かせる外国語」を目指すため、単元のゴールとして、麗澤大学生や留学生を招待し、英語を使ってコミュニケーションを図る交流会を年間指導計画に位置付けた。これまで2年間取り組んできた外国語活動の実践の概要を以下に示す。

2. 実践の概要

(1) 実態把握

実践に先だって、「読む」「書く」「聞く」「話す」の中で、児童がどの力をつけたいと考えているのかを把握するため、全校児童にアンケート調査を実施した。結果は以下のとおりである（2017年度末の児童アンケートの集計による）。

表1 2017年度学年末全校アンケート結果

話す	聞く	読む	書く	無回答	合計
242	57	54	35	81	469
51%	12%	11%	7%	17%	100%

この結果から、全校児童の半分以上が外国語を話したいと考えていることがわかった。「聞く」力をつけたいという回答は「話す」に比べると高いとは言えないが、話すためには聞くことが不可欠であることを踏まえ、2018年度は「話すこと」「聞くこと」を重点においた年間指導計画を立てた。その際、単元ごとに明確なゴールを示し、年間指導計画を踏まえたモジュール計画や授業計画においても、そのつどゴールを示すことで、児童自身が身に付ける力を自覚できるようにした。そうすることで活動が明確になり、児童にとって、わかりやすい授業が展開できると考えた。具体的な取組は以下の通りである。

(2) 年間指導計画とモジュール計画の作成および学校全体での外国語活動の取組

①年間計画の作成

2017年度末、柏市教育委員会指導主事からの助言を参考にしながら、全校児童の実態を踏まえた年間指導計画を作成した。児童の「学びたい」「知りたい」を意識した年間計画を作ることによって、外国語活動に対する意欲化が図れると考えたからである。

本校は文部科学省のカリキュラム・マネジメント調査研究校として、高学年では年間70時間の外国語活動を実施している。6年生は「We can2」と「Hi friends2」、「We can1」の授業を網羅できる計画を、5年生は、「We can1」と「Hi friends1」、「Let's try」を網羅することを意識した年間指導計画を作成した。



写真1 年間指導計画

年間指導計画作成の際の留意点として、6年生の場合、「We can2」と「Hi friends2」、「We can1」のテキストの中で、例えば「can」を用いた内容や「like」を用いた内容など、単元によって取り扱う単語や熟語が重なっているところがあった。単元ごとに丁寧に行うと限られた時数の中で学習しきれないと判断し、まとめて学習できる場所は補足説明を加えて学習できる計画を立てた。

教員の中には「授業をどう扱えばよいかわからない」「流れがつかめない」等、外国語活動に対して苦手意識を持つ雰囲気がある。

そこで、教科書出版社が出す「移行期間における学習内容例」を参考に、授業の一助となるよう、各学年に応じた学習内容を作成し、年間指導計画と並行して見られるように3年生～6年生までの「外国語年間指導計画」を作成した。

年間指導計画では、前述したように、どの単元もゴールを明確に示した。また、黄色が朝モジュールで学ぶ内容、白が授業で学ぶ内容、青が単元のゴールとするなど、色分けをして表した。

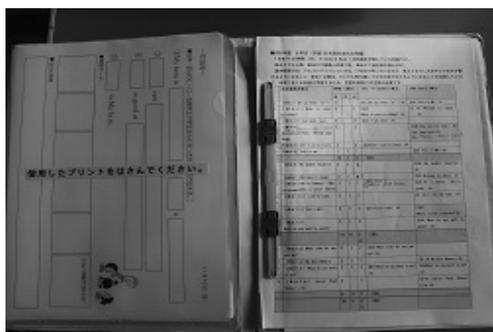


写真2 年間指導計画



写真3 年間指導計画 (内容)

②モジュールの年間計画

モジュールで行う学習内容は、授業で使う新出単語の学習と、それを使ったアクティビティができるように計画を立てた。そうすることにより、授業中に単語を教える時間が削られて、内容に特化できると考えた。また、年間指導計画は年度当初の計画であり、授業の進み具合や児童の実態等に応じて、柔軟に変更してもよいこと、ただし、変更した場合

は計画表に修正を加えるよう、各学年に周知を図った。

(5) 年 級 期 間						
週	日付	単元	分節①	分節②	分節③	成果
41	10月9日	He is funny. (She is great.)	『Who is that?』 Quizを作る	『Who is that?』 Quizを作る	『Who is that?』 Quizを作る	☆☆☆☆☆
42	10月12日					
44	10月20日	He is funny. (She is great.)	『Who is that?』 Quiz	『Who is that?』 Quiz	『Who is that?』 Quiz	☆☆☆☆☆
45	10月23日					
47	10月30日	Like my town.	世界の国のアール・ドゥ・ペイントを見つめる	世界の国のアール・ドゥ・ペイントを見つめる	英語でまとめる	☆☆☆☆☆
48	11月2日					
50	11月9日	Like my town.	英語でまとめる	世界の国のアール・ドゥ・ペイントを見つめる	世界の国のアール・ドゥ・ペイントを見つめる	☆☆☆☆☆
51	11月12日					
53	11月20日	Turn right.	図象の復習	図象の復習	図象の復習	☆☆☆☆☆
54	11月23日					
56	11月27日	Turn right.	WC-07 Let's play! ボイイングゲーム	コマンドゲーム	WC-07 Let's play! WC-07 Let's play! ボイイングゲーム	☆☆☆☆☆
57	11月30日					
58	12月4日	What do you want to watch.	WC-08 おかしな言葉ごっこ ツルゲーゲーム	WC-08 おかしな言葉ごっこ ツルゲーゲーム	好きな番組を紹介するための発表方法を考える。	☆☆☆☆☆
59	12月7日					
61	12月11日	What do you want to watch.	好きな番組を紹介するための発表方法を考える。	好きな番組を紹介するための発表方法を考える。	好きな番組を紹介するための発表方法を考える。	☆☆☆☆☆
62	12月14日					
64	12月18日	What do you want to watch.	What do you want to watch. 注: 使って自分の好きな番組を紹介しよう。	What do you want to watch. 注: 使って自分の好きな番組を紹介しよう。	発表式	☆☆☆☆☆
65	12月21日					
						☆☆☆☆☆

写真4 モジュール計画表

③学校全体での外国語活動の取組

小学校学習指導要領の改訂に伴い、2020年度から外国語科が全面実施される。「外国語科」や「外国語活動」を円滑に実施できるようにするため、2017年度中に「外国語の授業の取組」の基盤を作成した。

上述した「年間指導計画」の作成に加え、学習内容例を示すだけでなく、その年にどんなプリントを作成し、学習したかがわかるようにするためのファイル欄を設けた。こうすることで学習内容が具体的に理解でき、外国語活動の授業を行ったことがない教員の参考になると考えた。

次に「Today's goal」の設定である。どの時間にも学習問題があるように、外国語活動の時間においても、児童が「今日は何を学習するのか」と見通しを持つことが学習の理解につながる。そのために「Today's goal」を必ず設定することとした。

さらに振り返りシートの活用である。年度の初めに3～6年生共通の振り返りシートを作成した。授業の始めに「Today's goal」を

書く欄と、授業の終わりに「Today's goal」を踏まえて「今日の授業でわかったこと・感じたこと」を書く欄を設けた。また、学習したことを「◎・○・△」で自己評価するための項目も設けた。教え込む学習をすると外国語嫌いが出てしまう。「まずはやってみる」、「やってみてどうだったか」、「できなくても大丈夫」と児童に伝え、楽しんで授業に参加してもらいたいとの思いから自己評価欄も設け、振り返りを大切にした。

Lesson7 Who is your hero?  年 組 ()

今日でできたこと、できたこと、がんばったこと、わかったことなど

日付	Today's Goal	評価	感想 (がんばったこと・わかったことなど)
/ /			
/ /			
/ /			
/ /			

図1 振り返りシート

(3) 大学生と協働した朝モジュールの取組

年間指導計画の立案を2017年度前期に行い、後期10月より朝モジュールをスタートした。朝モジュールの時間は、麗澤大学外国語学部の学生と協働して行うこととした。教員と学生が連携した朝のモジュールの取組をはじめて2年目になる。麗澤大学生はゼミの一環として活動している。

学習は「モジュール年間計画」に基づいて、学生が主体となって活動を行う。学期ごとに学生と5・6学年担任の教員が打ち合わせをし、学生に活動の見通しを持たせる。その後、計画表に即して授業を展開する。学生がリードする形で、新出単語をスライドを利用して教えたり、単元に沿った画像や映像を見せたりして、児童が意欲的に学習できるようにした。15分の学習の後には、必ず5分間の振り返りや次時の授業内容について学生と共通理解を図るための時間を設けた。これは前年度

の「学生と教員との打ち合わせの時間がなかなか作れない」という反省にもとづき、モジュール終了の時間と1時間目が始まる間に5分間の休み時間を設けて簡単な打ち合わせをすれば放課後わざわざ集まって話さなくてもよいという考えから取り入れたものである。5分間では十分な打合せができないときには、メール等を通して連携を図った。

(4) 授業実践例①

授業展開に先立ち2018年9月に学年アンケートを実施した。結果は表2の通りであった(6学年85名の集計)。「外国語の授業は楽しいですか」の項目について、全体の約87%の児童が「楽しい」と答えている。また「外国語の授業は好きですか」の項目については、全体の約60%が「好き」と答えている。このことから、外国語の授業に関して肯定的な児童が多いことがわかった。一方で、全体の約40%の児童は外国語の授業を「少し苦手」や「苦手」と答えており、全体の約13%の児童がどちらかといえば外国語に対して否定的な意見を持っていることも分かった。また、「授業の中で苦手なことがある」と答えた児童は、「ある」と「ときどきある」を合わせて全体の約62%もいた。苦手意識が少しでもあると、児童にとって外国語活動が「苦痛」

表2 実態調査9月

①外国語の授業は好きですか。			
すき 52名	まあまあ 30名	苦手 3名	
②外国語の授業は楽しいですか。			
楽しい 74名	まあまあ 10名	あまり楽しくない 1名	
③外国語の授業の中で苦手だと感じることはありますか。(モジュールを含む)			
ある 19名	時々ある 34名	ない 32名	
④外国語の学習の中でつきたい力は何ですか。			
書く 18名	読む 7名	話す 55名	聞く 5名

な時間となる可能性が高い。このことに注意を払って授業を展開しなければならないことを確認した。

また、児童がつけたいと考える力の一番は、学校全体のアンケートと同様、「話す」力であることがわかった。これらの結果を踏まえ、授業実践では図2のような取組を実施した。

Lesson 8 - 3
 ①自分のヒーローを伝える。

単元	活動	指導上の留意点
5.	○Greeting ・ Good morning everyone. ・ How is the weather today. ・ What's day today. ・ What's the date today. ○Feeling-how are you? >	○ ○ ○●
5.	Today's goal ①自分のヒーローを伝える。 ・ 先生達のやりとりを聞いて内容を考える。	●Who is your hero? ○Who is your hero? ○My hero is NAGATO. ●My hero is _____ ●Who is your hero? He is a dancer. ○My hero is _____ He is good at dance every well. He can do Spanish. He is my hero.
30.	○2人が選手・観戦し、空想の3チームの中から自分のヒーローを選ぶ。 ・ 3チームの中からクラスでのテーマが一番多いチームを選ぶ。 ・ 使える単語の整理・ be good at-の使い方の復習・ can の復習。 ○クラスのみんなにインタビューする。 ・ "Who is your hero?" "My hero is-" 質問の発問をする。 ○全てのテーマが聞かれたか確認する。	○●● ・ フロントに自分のヒーローについて書く。(英語で) ・ 相手の職業や個性・得意なこと・できることを書く。 ・ 難しそうな言い回しは、適宜物に聞いてよい。 ・ 3チームの人達からこの空想世界を作る。 ○●●- 言い慣れない言葉にはフォローする。
5.	○まとめ。 ○振り返りシートを書く。	・ 外国語活動の本日のヒーローを具体的に詳しく紹介する練習をすること を伝える。

図2 授業実践例① 学習指導案

まず、「話す」力を重視したアクティビティの工夫である。単に「話す」だけのアクティビティを加えては、外国語が苦痛だと感じる児童にとって苦手意識を助長させてしまう恐れがある。そこで、話す力＝聞く力の向上を関連付け「Today's goal」を、担任とALTの会話の中から考え、見つけ出させることとした。そうすることで、今日の活動の流れを実際に見て、内容を把握することができるだけでなく、英会話を聞かなければ今日の内容がわからないことを通して、児童に「聞く必要感」を持たせた。ただし、習っていない単語を用いると苦手意識を助長させてしまう。そこで、モジュールで習った単語や、前時で習った英文を使うことを意識して「Today's goal」に示すように心がけた。

また、「必要感を持たせる授業」に取り組んだ。例えば、「Who is your hero?」の単元では、本時で自分のヒーローを伝えようとい

う「Today's goal」設定した。授業では、ヒーローのテーマを①スポーツ選手②芸能人③家族の3つとし、その中から自分のヒーローを決めさせた。次に、お互い何を選んだかを伝えずにクラスの中でどのテーマがNo.1かを予想させ、その段階でのクラスNo.1のテーマを決めた。予想が合っているか検証するため、お互いの自分のヒーローを聞く活動につなげた。アクティビティでは5人の友達に「Who is your hero?」と聞き、英語を使わなければわからない状況を設定した。5人の友達に聞いた結果を集約し、最後にどのテーマが何人いるのかを全体で確認した。

児童の振り返りでは「色々な友達のヒーローが聞いて楽しかった」「もっと色々な友達のヒーローを聞いたかった」「外国の人には自分の英語は伝わるのか」という意見・感想があったため、麗澤大学に協力を仰ぎ、留学生との交流会を提案した。

(5) 授業実践例②

授業実践例①での児童の意見を踏まえ、麗澤大学の学生に交流会を提案した。その目的は「学習したことをもとに留学生とコミュニケーションする」ことである。麗澤大学には留学生が多数いる。全く日本語を話せない留学生が多い。こうした留学生との交流で、本当に自分たちの英語は伝わるのかを実感するきっかけになると考えた。これを、クラブや委員会のない時間（本校では「学習タイム」と呼ぶ）に学年で一斉に行えば、児童にとって「学びたい」「楽しい」と思える活動ができると考えた。

交流会の内容は大きく2つ用意した。1つ目は、初対面の留学生と児童との心の距離を縮める活動である。具体的には、絵カードを見て「What color?」や「What animal?」、「What subject?」といった簡単な単語を用いた質問をして、学年を6グループに分け、グループごとに1人ずつ答えていくものである。

最初に全員答えられたグループを勝ちとした。

2つ目は、自分のヒーローを麗澤大学生と留学生に伝える活動である。これは「Who is your hero?」の単元のゴールである「周りの人に自分のヒーローを詳しく伝えよう」に即した活動である。その際に「be good at～」と「He/She can～」も用いて、自分のヒーローの得意なこととできることを具体的に相手に伝える場を設定した。

「日本語を話せない留学生に自分の英語が伝わるのか」という期待と不安を胸に、児童はそれぞれに自分のヒーローを一生懸命伝えていた。また、必要感をもたせるため、麗澤大学生や留学生に自分のヒーローを伝え、学生や留学生のヒーローについて聞くと、1枚のカードがもらえる仕組みをつくった。その活動を6回行うと、「THANKS」という1つの単語になる。児童は、現れる単語は何かを発見するために、しっかりと自分のヒーローを伝え、相手のヒーローも聞き取らなければならない。このようなゲーム性をもたせることで、活動に対してより意欲的に行えるよう工夫した。

交流会の最後に、6年生から留学生に質問タイムを設けた。その際、「習った英語は使えたら使いましょう。」と声掛けをした。すると児童は臆することなく、「What color do you like?」や「What animal do you like?」、「What food do you like?」など次々と質問していた。難しい言葉や習っていない言葉でも伝えたいことがあれば、学生に質問しようとする姿に、これまでの学習の積み重ねが生きていると実感した。

3. 児童の変容

これらの活動を通して2学期末に2種類のアンケートを実施した。結果は表3、図3・4の通りである（6学年85名の集計による）。

アンケートの結果からわかるように、「外国語活動は好きですか」の9月調査では、全

体の76%が「好き」と答えていたのに対して、12月の調査では80%が「好き」と答えるなど、肯定的な回答が増加した。何より「苦手」と答える児童がいなくなった。また、「外国語活動の授業は楽しいですか」の項目でも、以前は「あまり楽しくない」と答えていた児童が、今回は「楽しい」へと変化していた。その理由として、「授業を通してわかることが

表3 交流会後アンケート結果

①交流会は楽しかったですか。		
はい 69名 (81%)	まあまあ 16名 (19%)	いいえ 0名 (0%)
②留学生に習った英語を使うことができましたか。		
できた 56名 (66%)	まあまあ 20名 (26%)	あまりできなかった 7名 (8%)
③留学生の英語は聞き取れましたか。		
聞き取れた 17名 (20%)	まあまあ 50名 (59%)	あまり聞き取れなかった 18名 (21%)
④機会があればまた交流会をやりたいですか。		
やりたい 73名 (86%)	まあまあ 10名 (12%)	どちらでもよい 2名 (2%)

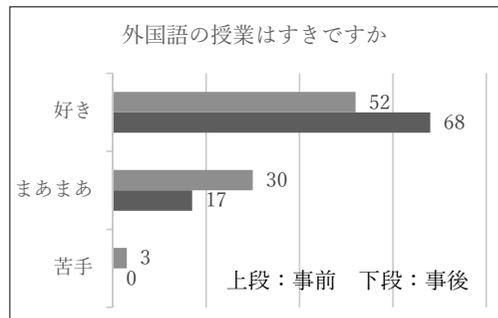


図3 事後アンケート (1)

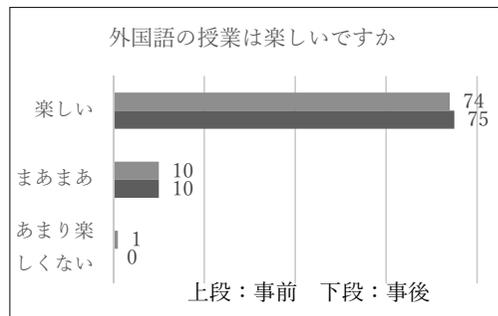


図4 事後アンケート (2)

増えてきたから」や「ゲームなどで楽しく勉強できるから」と答えていた。

振り返りシートの記述に変容が見られた2人の児童の事例を示す。一人目は、児童Aの変容である。

児童Aの振り返りカードを見ると、活動初期には「今日の内容は難しかった」とか「ぜんぜん英語が書けなかった」などと記述されており、苦手意識があることがうかがえる。しかし、活動後のシートには、授業を通して「できないこともあったけど、楽しかった」とか「もう1回やりたい」などと記され、できなかったこともあったが楽しんで授業に臨んでいた姿がうかがえる。

<活動初期>

Today's goal
自分の町にあるものどほしいものをまとめよう。
・あるものが全然書けなかった・・・
ポスターに書く単語を集めよう。
・色々な単語を集めることができた。

<活動後>

Today's goal
何のスポーツを見たいか尋ねよう。
・2人しか聞けなかったけど <u>楽しかった</u> 。
友達の見たいスポーツを尋ね合おう。
・予想があまり当たらなかったけど <u>楽しかった</u> 。
2学期の復習をしよう。
・とっても楽しかった。おもしろかった。2学期の復習がしっかりできた。

次に、児童Bの事例を示す。

<活動初期>

Today's goal
自分の町にあるものどほしいものをまとめよう。
・しっかりまとめられた。 ・友達のほしいものが分かった。
ポスターに書く単語を集めよう。
・単語が集められた。

<活動後>

Today's goal
何のスポーツを見たいか尋ねよう。
・しっかりと尋ねることができた。 ・友達の見たいスポーツが何かわかった。
友達の見たいスポーツを尋ね合おう。
・友達の見たいスポーツがわかった。
好きなスポーツを尋ね合い、クラスのNo1を決めよう。
・自分の好きなスポーツが卓球で、クラスNo1も卓球だったから嬉しかった。
2学期の復習をしよう。
・ <u>とっても楽しかった</u> 。 <u>ゲームが楽しかった</u> 。復習ができた。

児童Bは、「Today's goal」に対して、当初は「単語が集められた」「できた」などの振り返りが多かった。しかし、次第に「友達の見たいスポーツがわかった」や「楽しかった」など、記述内容が具体的になっており、意欲的かつ楽しんで活動している様子がうかがえる。

4. 実践の成果と課題

小学校高学年における外国語科の実施に向けて、児童の必要感や意欲を引き出すことに主眼をあてた本実践において、次のような成果を挙げることができた。

- ・毎時間の「Today's goal」の設定によって、この時間に身に付ける力を意識化させることができた。
- ・アンケート結果を踏まえて、児童に身に付けさせる力を「話す」「聞く」に重点化し、「読む」「書く」活動を、「話す」「聞く」ために行うよう関連づけを図ることができた。
- ・通常の45分授業を年間35時間設定し、加えて、これと関連させたモジュールの時間を15分×90回で30時間分を確保できた。45分授業とモジュール授業の共通の目的である英語でコミュニケーションをとる時間を年間5時間分確保し、年間指導計画に英語活用の目標とそれに向けた練習を位置付けた

こと。

- ・麗澤大学外国語学部の学生と連携したこと。指導内容を学生と共有化した上で、学生も前向きに取り組めるよう、モジュール時間は学生主導で進めるようにした。これにより、児童が学生に親しみやすくなり、意欲を持ちやすくなった。学生も大学教員の指導のもとで工夫した資料等を用意し、担任が考える以上の活動が実現できた。

一方、外国語科の全面実施に向けて、以下の点で年間指導計画のよりいっそうの改善を図っていくことが課題である。

- ・英会話に慣れて欲しいために、ALTと担任の英会話で「Today's goal」を示していたが、英語だけの場合はわからなかったとする児童が65%いた。日本語で適切にフォローしながらゴール提示を的確に行いつつ、児童の意欲化が効果的に図られるよう、指導方法の工夫改善を図らなければならない。
- ・留学生との交流会において20%の児童が聞き取れておらず、苦手意識につながる傾向がみられた。前述の課題と同様、一度聞いてわからなくても何度も聞き直すことや、少しわからない場合でもコミュニケーションを続けていくような意識づけが行えるよう、指導過程の工夫改善を図らなければならない。
- ・当初、麗澤大学との連携には大きな抵抗感があったが、実施後は教師・児童・学生の3者それぞれに学びがあり、児童の意欲喚起には大いに役立つ方法であることがわかった。こうした連携を継続するためには、授業計画の情報共有を確実に行っていくことが重要である。5分間の打ち合わせを機能させると同時に、メールや打ち合わせ会議に加えて、テレビ会議等を活用した情報共有手段を機能させていくことが課題である。

本実践を通して、単元ごとにゴールを明確に示し、児童の「学びたい」「楽しい」を大

切にした授業を行うことで、児童の意欲を高めることができた。また、朝モジュールと授業の時間の関連付けを図り、「友達に聞かなければわからない」や「話すと言えが見つかると」など、英語を使う必要感を持たせる授業を展開すると、児童の学習意欲が向上し、楽しんで活動できることもわかった。

同時に、「教師も楽しんで授業をする」ことが大切である。「苦手だから」とか「わからないから支援員にお願いしようかな」と言ってしまう気持ちは理解できる。筆者も英語が苦手でT1で授業しなければならないと聞いたときには不安と焦りしかなかった。しかし、それを逆手にとって「児童と共に学ぼう」と考えを変えて授業に臨むと、新しい知識が増える楽しさや、児童と一緒に考えるわくわく感を得ることができた。大学生との連携で自らの英語の知識を増やし、学生の斬新な考えに学ぶこともできた。児童の「学びたい」「楽しい」のために全力を注ぐと、多くの発見ができると気づいた。今後も継続して楽しく取り組んでいきたい。

(赤坂芳美)

5. カリキュラム・マネジメントの充実に向けてーカリキュラム研究者の立場からー

2017年3月に告示された小学校学習指導要領の総則に「各学校の特色を生かしたカリキュラム・マネジメントを行う」ことが明示された。新学習指導要領の全面実施は2020年度からとされているが、移行期間中であっても各学校は新学習指導要領の趣旨を踏まえて教育課程を編成・実施することが求められている。本実践は、2020年度から高学年に新設される「外国語科」の優れた先行実践であるばかりでなく、小学校におけるカリキュラム・マネジメントの事例としても意義をもつ。そこで、本実践をカリキュラム・マネジメントの事例として捉え直し、その特徴と意義を考

察する。

カリキュラム・マネジメントについて、新学習指導要領「総則」には次のように記されている¹⁾。

各学校においては、児童や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程に必要な人的・物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の質の向上を図っていくこと（以下「カリキュラム・マネジメント」という。）に努めるものとする。

この記述は、各学校のカリキュラム・マネジメント成立のために必要な3要素（①教科等横断的視点による教育内容の組織的編成、②PDCAサイクルの確立、③地域を含めた人的・物的資源の活用）を端的に表現したものである。

本実践は、外国語活動及びそれと関連するモジュール活動により教育内容を編成しており、教科等横断的視点を意識しているとまでは言えない。しかし、児童の実態把握にもとづいて「教育内容の組織的編成」を図っている点で、カリキュラム・マネジメントの①の要素を含んでいる。また、年間指導計画やモジュールの年間計画を作成し、これにもとづく授業を展開しつつ、児童全体へのアンケート結果や活動後の振り返り、個々の児童の変容などを丁寧に捉えて柔軟に計画の修正を図っている。つまり、カリキュラム・マネジメントの②の要素である「PDCAサイクル」が確立されており、それによって、児童の意欲を高める姿（「学びたい」という気持ちを高める姿）が捉え直されるという好循環を生み出している。さらに、近隣の大学との連携により、大学生によるモジュール活動や留学生との交流会を実現しており、カリキュラム・

マネジメントの③の要素を満たしている。このように、その適用範囲は一部の教科にとどまるとはいえ、新学習指導要領に示されるカリキュラム・マネジメントの3要素を満たす体制を短期間で構築したところに本事例の第一の意義がある。市販の教育雑誌等では、すでにカリキュラム・マネジメントが確立した学校のノウハウが紹介されることが多いのに対して、一からこれに取り組みなければならぬ多くの学校にとって、本実践は参考になるだろう。

村川雅弘はカリマネ（カリキュラム・マネジメントの略称）を次の5つに整理している²⁾。

- ①教育課程のカリマネ
- ②教科・領域のカリマネ
- ③学年のカリマネ
- ④学級のカリマネ
- ⑤自己の学びのカリマネ

本事例は、現行の「外国語活動」から新設の「外国語科」への円滑な移行を目指して試みられた実践研究であり、上記の分類では②に該当する。前述した「教科等横断的視点」は分類①に求められる視点であり、本実践にこれが不足していることは問題ではない。村川は、②の開発責任者を「各教科主任や道徳主任、総合主任」などと想定している。開発責任者の役割は、その教科・領域等を通して、卒業までにどのような学力をつけるのか、そのための授業づくりや基本方針をどうするのか、教授組織や環境整備、研修をどう進めていくかを考え、実践し、見直していくことであるという。実際のところ、本実践を中心的にすすめた赤坂教諭は主任クラスの中堅教員ではなく、教職4年目（本実践時）の若手であった。この事実は、カリキュラム・マネジメントにおいて若手教員が力を発揮する可能性があることを示唆する。赤沢早人は、「若手教員であるからといって、つねに未熟であったり、つねに先輩教員たちの後追いであったりするわけではない。若手教員が自らの強

みを生かしながら、教育指導の主体として職能を発揮できるようになることが、そのライフステージのキャリア課題である」と指摘し、中堅教員がカリキュラム・マネジメントを主導する場合も「若手教員をエンパワーしていく」ことが求められるとしている³⁾。本実践はまさに、カリキュラム・マネジメントを通して若手教員のエンパワーメントが図られた実例であると言えるだろう。ここに、本事例の第二の意義を見いだすことができる。

(浅野信彦)

〈注〉

- 1) 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年3月告示）』2017年、18頁
- 2) 村川雅弘「カリキュラムマネジメントの理解を深める研修の開発」田村知子・村川雅弘・吉富芳正・西岡加名恵編著『カリキュラムマネジメントハンドブック』ぎょうせい、2016年、185-186頁
- 3) 赤沢早人「若手教員が育ちベテラン教員が活きる『カリマネ』」村川雅弘・野口徹・田村知子・西留安雄編著『「カリマネ」で学校はここまで変わる！』ぎょうせい、2013年、178頁

謝辞

本研究を進めるにあたり、ご指導くださった柏市教育委員会学校教育課指導主事・麻生織江先生、酒井根東小学校校長・梅津健志先生にお礼を申し上げたい。また、麗澤大学生、交流会に参加してくださった留学生のおかげでできた研究でもある。心からの感謝の意を述べたい。

(赤坂芳美)